

直方ミニバスケットボールクラブだより

次代を担う子どもたちのために・・・



9月27日(日)の練習のはじめに、コーチが子どもたちへメッセージをおくってくれました。わずか約半年間のかかわりでしたが、コーチなりにみてきた直方クラブの子どもたちの活動のようすについて、また自身が子どもたちから学んだこと、さらにコーチ自身の直方クラブ時代、中学と高校での部活時代をふりかえりながら、そこで(ミニ)バスケットを通じて知った自分のこと、つながってくれたなかまの大切さ、支えてくれたたくさんの人たち...「だからこそ今の自分がある」と、具体のエピソードを交えて貴重な話をしてくれました。

- 人にはそれぞれ持ち味(個性)があり、自分にも何かある。それが自分の果たすべき役割で、それぞれの持ち味を寄せ合って役割を分担して一つのプレーをつくり、一つのチームになっていく。
- なかまが自分のためにボールをつないでくれる。だから自分もなかまのためにボールをつなぐ。なかまが自分を支えてくれる。だから自分もなかまを支える。(ミニ)バスケットを通してそんなつながりを味わうことができた。
- ことばにして話し合うことは、互いを知り合うこと。だまっていたではわからない。話し合ってみてはじめて、考えてることが同じということも分かるし、ちがうということもわかる。そんな考え方もあるのかと自分の考えのはばがひろがる。
- まちがっていたとわかったら、「ごめんね」と言えることが大事。それは負けたことじゃない。仮に「負け」であってもそれを受け入れられる強さをもとう。「ごめんね」と言えないのは「弱さ」。直方クラブで大切にしている“自分に勝て”は、“自分の「弱さ」に勝て”ということ。
- いいわけばかりしてあきらめるのではなく、「でも、がんばる」と言える自分になる。いろいろ納得できないことがあるときもあるけど、「でも、がんばる」。きついとき、つらいときもあるけど、「でも、がんばる」と言える自分になる。

最後に、「自分は今のところ小学校のときから決めていた自分の夢に向かって進むことができている。それは、(ミニ)バスケットでのなかまやたくさんの人との出会いがあったから...」と話します。私からしたら、直方北小学校の体育館でほんの数年前まで指導していた子が、こうして成長し、後輩の子どもたちを前に語ってくれる姿と、その内容をとてもうれしく、誇らしく思いながら聞いていました。

学校教育・社会教育の制度・システムの改善を・・・

こんな素敵な時間をつくり出す子どものスポーツ活動ですが、とりまく状況は、決して好ましいものとは言えません。チーム強化、優秀選手の発掘と育成を最大の評価

点とする組織の理念と現場の指導（者）、保護者等の考え方、中学の「部活」のあり方、教員の多忙化対策としての外部指導員導入の問題、あまり語られていませんが最も重要な子どもの「部活」離れ等...

なぜこのような状況になっているのでしょうか。一人ひとりすべての子どもの思いを汲むことなく、声に耳を傾けることなく、私たちおとなが見直すねきところから目をそらし、放置し続けてきたことが最も深刻な問題だと思うのは私だけでしょうか？

変化する社会の中で、小学生のスポーツ活動のあり方は今の方向性でいいのでしょうか。スポーツに親しむ子どものすそ野は広がるのでしょうか。中学校で行う「部活」の果たすべき役割は終えているのか、そうでないなら、これまでとはやり方の違う

「部活」のありようが求められているのではないか。社会教育として活動するスポーツクラブと学校教育としての「部活」の役割を明確にし、子どもが選択できるようにすればいいのではないか。公教育としての「部活」が果たすべき役割は、どんな生活環境にある子どもでも希望すれば活動できる教育活動でなければなりません。

問題は、すでに何年も前から浮かび上がっているのに、おとながここまで放置してきたつけは、やっぱり子どもにかえってきています。

学校現場の教員不足の問題はさらに深刻です。各県が教員不足の問題をようやく声に出し始めていますが、私の感覚からすれば、もう何年も前からわかっていたことではないか...という感じです。新規採用の年齢枠を大幅に膨らませたり、教員の採用資格や採用試験内容を大幅に緩和したり...。こんなことまでしていいのかということと同時に、こうまでしなければ教員数を確保することができない現実。そのうちこうまでしても教員の確保は難しくなるでしょう。なぜ、ここまで教員離れが進んでいるのか、そこに目を向け社会的な問題として多くの人が声をあげなければ変わりません。政府・文科省がようやく「30人学級」の実現に動き始めようとしています。教育現場の問題をみれば当然の制度改善で、私たちは何十年も前から求め続けてきているものです。

子どもも、おとなも「今のやり方ではできない“NO”」をつきつけているのですが、ここまでは、なかなか社会的な大きな声になっていません。私たちおとなが次代を担う子どもたちのためにすべきことは、身の回りにある問題を社会問題として提起できる力をもつことです。現場の問題ですが、提起する先は現場ではありません。現場（子どもを含む）の声に耳を傾け、それをもとに市や県の施策、国の政策に通じた提起にしていかなければなりません。それは「対立」ではなく、「協調」を求めての行動です。